

国立民族学博物館共同研究会

「思い出」はどこに行くのか？

Where do personal memories go ?

ユビキタス社会の物と家庭にかんする研究会

Studies on things and homes in the ubiquitous society.

ゆもか研

NEWS Vol.1

center

October 2004

CONTENTS

* 「ゆもか研」について

研究会のメンバー……2

研究の目的と内容……3

* 第1回ミーティングの報告

物と家庭にまつわる一つのエピソード

: 2002年ソウルスタイル (発表: 佐藤浩司代表) ……4

思い出研究の動向

: なぜ、いま「思い出」なのか—— (発表: 野島久雄) ……8

* 編集後記……18

「思い出はどこに行くのか?——
ユビキタス社会の物と家庭にかんする研究会」
メンバー

代表 ● 佐藤浩司
Koji Sato

国立民族学博物館

副代表 ● 山本泰則
Yasunori Yamamoto

国立民族学博物館

内田直子
Naoko Uchida

夙川学院短期大学家政学科

大谷裕子
Yuko Otani

編集兼ライター

加藤ゆうこ
Yuko Kato

シー・ディー・アイ

國頭吾郎
Goro Kunito

NTT ドコモネットワーク研究所

久保正敏
Masatoshi Kubo

国立民族学博物館

久保 綾
Aya Kubosumi

コニカミノルタテクノロジーセンター イメージング文化研究所

黒石いずみ
Izumi Kuroishi

青山学院女子短期大学教養学科

佐藤優香
Yuuka Sato

神戸大学発達科学部

清水郁郎
Ikuro Shimizu

立命館大学文学部

須永剛司
Takeshi Sunaga

多摩美術大学美術学部情報デザイン学科

長浜宏和
Hirokazu Nagahama

大和ハウス工業 総合技術研究所

野島久雄
Hisao Nojima

NTT マイクロシステムインテグレーション研究所

南 保輔
Yasusuke Minami

成城大学文芸学部

安村通晃
Michiaki Yasumura

慶應義塾大学環境情報学部

山本貴代
Takayo Yamamoto

博報堂生活総合研究所

オブザーバー ● 関根康正
Yasumasa Sekine

日本女子大学人間社会学部現代社会学科

Where do personal memories go ?
Studies on things and homes
in the ubiquitous society.

大谷裕子
Yuko Otani
編集兼ライター

加藤ゆうこ
Yuko Kato

シー・ディー・アイ

國頭吾郎
Goro Kunito

NTT ドコモネットワーク研究所

久保正敏
Masatoshi Kubo

国立民族学博物館

久保 綾
Aya Kubosumi

コニカミノルタテクノロジーセンター イメージング文化研究所

黒石いずみ
Izumi Kuroishi

青山学院女子短期大学教養学科

佐藤優香
Yuuka Sato

神戸大学発達科学部

清水郁郎
Ikuro Shimizu

立命館大学文学部

須永剛司
Takeshi Sunaga

多摩美術大学美術学部情報デザイン学科

長浜宏和
Hirokazu Nagahama

大和ハウス工業 総合技術研究所

野島久雄
Hisao Nojima

NTT マイクロシステムインテグレーション研究所

南 保輔
Yasusuke Minami

成城大学文芸学部

安村通晃
Michiaki Yasumura

慶應義塾大学環境情報学部

山本貴代
Takayo Yamamoto

博報堂生活総合研究所

オブザーバー ● 関根康正
Yasumasa Sekine

日本女子大学人間社会学部現代社会学科

members

「思い出はどこに行くのか？ ユビキタス社会の物と家庭にかんする研究会」 が発足しました。

ユビキタスとは、ラテン語の「ubique」＝「あらゆるところに」を語源とする英語で、コンピュータネットワークがあまねく偏在するという状態を指しています。

それはパソコンや携帯電話の利用にとどまりません。

身の回りのあらゆる物、目に見えないところにも

IC タグというアンテナつきの極小シリコンチップが組み込まれ、

いつでもどこでも情報のやりとりをすることができる社会が現実となりつつあります。

その《ユビキタス社会》と《思い出》、《物》、《家庭》はどのようにつながっていくのでしょうか。

まずは、下にある「本研究について」をお読みください。

そして、研究会のテーマをより身近に感じ、理解を深めていただくために、

7月の第1回ミーティングで行われた2つのプレゼンテーションの報告も

ぜひごらんください（4ページ〜）。

この研究会は今後約3年間活動します。

ぜひ、ひとりでも多くのかたに関心を持っていただき、

その成果を楽しみにしていただけることを願っています。

本研究は、国立民族学博物館の04年度機関研究に採用されました。
国立民族学博物館の機関研究については下記のサイトを参照してください。

■国立民族学博物館 HP > 研究部 > 機関研究
http://www.minpaku.ac.jp/research/project/minpaku_project.html

「本研究について」

■ 研究の目的

個人の情報さえ自由にあやつるユビキタス社会がやってこようとしている。住宅設備は自動化され、生活用品にはすべて固有の管理情報がつけられて、日常生活の雑務から人は解放される。産業界はそう近未来の夢をかたる。けれども、そのとき家庭はどんな姿をみせているのか、人間はどうなっていくのか、じつのところ、誰も明確なイメージをつかめないまま、ユビキタス社会をささえる要素技術の開発は急速にすすみつつある。

現代人は大量生産された膨大な物にかこまれてくらしている。私たちは、それらの物を生活用品として利用するだけでなく、さまざまな思い出を物に託して自己の世界をかたちづくってきた。家庭はそうした物を

介したコミュニケーションの基地になっている。個人ホームページや自分史の流行、物への偏愛や懐古趣味といった現象は、こうした自己への関心のたかまりをしめすものだ。その理由は生きていく意味の解決、神話や歴史にかわる個人の実存への回答（＝リアリズム）を現代人はもめているのではないだろうか？

きたるべきユビキタス社会においても、人間の個性がコミュニケーションのコンテンツの中核をなすことに変わりはないであろう。本研究の目的は、個人の思い出を対象に、物とそれが機能する場である家庭の現状を把握すること、そして、ユビキタス社会の技術の方向性にたいして一定の提言をおこなうことにある。

■ 研究の内容

本研究の基礎資料となるのはつぎのふたつの先行研究である。

① CDI (Communication Design Institute) がおこなった生活財生態学：

1970年代から数百の家庭を対象として繰り返し行われた家のなかの物の悉皆調査。日本の家庭にある物の数や時代・地域による変遷などにかんする唯一のデータとなっている。

② 「2002年ソウルスタイル」の生活財調査：

国立民族学博物館でおこなわれた展示のために、韓国ソウルのある家庭のすべての物を調査した。総数1万点あまり。現在は家族の所有するすべての家族写真約3千点の分析がすすんでいる。

これらの成果をベースにしなから、本研究では、現代家庭における「物」のもっとも重要なコンテンツとして個人の「思い出」を位置づけ、「思い出」にまつわる多方面の知見と可能性をあきらかにするための研究会を組織する。

Presentation①

物と家庭にまつわるひとつのエピソード ：2002年ソウルスタイル

speaker：佐藤浩司（国立民族学博物館・本研究会代表）
profile：http://www.minpaku.ac.jp/staff/satou_kouji.html

もともと私は建築人類学が専門で、東南アジアの民家の研究などを行っています。それがなぜこのような研究会を立ち上げるに至ったのか——。それは国立民族学博物館で行った「2002年ソウルスタイル」という展覧会の予期せぬ成果でした。

「思い出はどこに行くのか？」という、少し変わったサブタイトルがついているこの研究会。佐藤氏の発表は、個人が持つ思い出をどう扱うのかという話から始まりました。

建物を保存しても、そこで 生きた人の思い出は救えない

アーティストの伊達伸明さんが「建築物ウクレレ化保存計画」という活動をしています（http://www.sam-hi-ho.ne.jp/ukulele/keikaku/bottom_index.html）。壊される建築物の一部を使ってウクレレを作るというアートです。

家の中にはさまざまな思い出が残されています。たとえば子供のころに刻んだ柱の傷や椅子に貼り付けたシールのあと、火事の痕跡など、家族にインタビューをして、その家のどこに思い出がいちばんこもっているのかを聴き、そこをすくい上げて

ウクレレを作るんです。建物は壊されてしまうけれど、依頼主である家族にはウクレレとしてその建物の思い出が残っていくというプロジェクトです。

伊達さんが言うには、建築家は建物の保存運動はやるけど、壊されると決まるとたんにみんななくなってしまうと。たしかに、我々はこれまで歴史や伝承など「社会の思い出」を研究対象にしてきました。けれども、いくら文化財を保存しても、それで個人の人生がすくいあげられるわけではないと多くの人を感じている。自分自身の生きた時間の意味を確認したい。その飢餓感がこうした作品づくりをささえている。だからこそ、特別でもなんでもないふつうの家に住む、ふつうの人たちの思い出を何とかして形に残していくことが必要だと伊達さんは考えたのです。

本来、あまり関心が払われることがなかった個人の思い出を、正面切って取り上げるような研究が必要になってきたと思います。それが、この研究会に「思い出」というタイトルをつけた大きな理由です。

この研究会では個人の思い出が宿る対象として、家庭にあふれる「物」に着目しています。家の中に存在するありとあらゆる物には、どのように手に入れたのか、どんなふうに使ったのかなど、持ち主の記憶がセットになっています。家庭にある膨大な物こそ、そこにくらす人の世界をかたちづくるのです。そのことに気づいた経緯を、佐藤氏が語ります。

◀寺山邸ウクレレ。父の世界をきつかけに家の建替えを決意した寺山直哉さんはあちこちに落書きをしシールを貼り付けける子供だった。見かねた父が「貼るならこだけ」と許したのがテレビ横の柱。この柱を素材に完成したウクレレである（http://www.sam-hi-ho.ne.jp/ukulele/keikaku/3beatukulele.html 45）



©COBA STUDIO



▲ロングハウスの外観。屋根に線が入り色が分かれているので、継ぎ足した部分が一目瞭然



▲通廊ではさまざまな日常作業がおこなわれる

建物の調査から 生活財（物）の調査へ

ボルネオのロングハウスの調査

上の2枚の写真は、ボルネオのイバン族が住むロングハウスの様子です。一種のアパート、つまり集合住宅になっています。

中は広い通廊というか広場のようなものあって、その背後に各住戸が続いています。通廊と住戸部分を合わせたものを、一つの家族がつくるんです。最初にある家族が自分の持ち分を建てると、別の家族が同じ構造の空間を継ぎ足していきます。トタン屋根に線ができてるのは、次から次へと建て増していくからなんです。

このように、パブリックな空間をふくめて、それぞれの家族は各自の家づくりをしていくわけです。ふだんはこの通廊部分に集まって作業をしたり、お客さんが来るとここに泊まることもできます。非常に豊かで開かれた共有空間になっています。

通廊に面した扉をはいると住戸空間があります。今ではこの住戸部分をそれぞれの家族が思い思いに内装していて、構造は伝統的なままなのに、見違えるほどモダンな雰囲気になっているものもあります。

ロングハウスとアパートの違い

なぜこのような話をしたかという、我々のアパートとロングハウス

の違いを考えてみる必要があると思っただけです。

ロングハウスは前提としてまず家族があり、その家族が自分の意志で自分の家をつくっていくというプロセスがあります。それに対して我々の住んでいるアパートは、アパートという箱がはじめにあって、そこに人がはいていくわけです。いわば、建物のほうが家族やアパート社会という人間関係をつくりだしている。

だから、ロングハウスのように伝統的な村落の場合、建物の構造を調べれば、その社会全体のイメージをつかむことができたのに、我々のアパートでは、同じような調査をしたとしても全体はけっしてわからない。なぜなら、アパートの構造は同じでも、そこに住んでいる人間がおなじ社会的背景を背負っているとはかぎらないからです。隣に韓国の人に来て住んでいるかもしれないし、その隣はまったく違うライフスタイルをとっているかもしれません。アパートの空間はべつに均質な社会を前提につくられているわけではないんです。

だから、ソウルのアパートを調査すると決まったとき、いくらアパートの構造を調べても、最終的にそこに住んでいる人間まで落とし込めるような成果は得られないと思ったのです。では、その中の人間をどうや

って調べるか、一人一人が抱えている問題にどうやって到達するか考えたとき、「物」に行き着いたわけです。

アパートという空間は、経済的条件や職場に近いなど外来的な要因で選択せざるをえなかったかもしれない。でも、その中に置かれた物については、少なくとも自分の意思で買ったもの、自分の意思で使っていますから、物を調べればその個人に到達できるのではないかと考えたんです。それが「2002年ソウルスタイル」という展示で物の調査をしようとした経緯です。

家の中にある物の調査で 見えてきたこと

「2002年ソウルスタイル」展

国立民族学博物館（大阪府吹田市）の特別展「2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔の暮らし」（会期2002年3月21日～7月16日）をごらんになったでしょうか。2002年は「日韓国民交流の年」で、サッカーのワールドカップのほか、日本でも様々な形の韓国展が行われていました。民博でも何かやろうということで、いわゆる李朝文化のものや伝統芸能など、いろいろなアプローチの方法はあるけれど、最も民博らしいことを、ということで結局韓国のアパートの調査をしようということになりました。

調査の過程でソウルの3LDKに住む李さん一家に出会い、アパートの持ち物、家具や家電、衣服はもちろん、冷蔵庫の中のキムチから結婚指輪、子供の教科書に至るまで、全部を民博が譲り受け、展示場に並べました。しかし、最初から家族の持ち物をくれると決まっていたわけではありませんでした。

なぜ家財道具を全部見せてくれたのか

我々の調査は、家の中にある一つ一つの物について全部デジタルカメラで撮り、それが家族にとってどういう意味があるかという聞き取りから始まりました。その写真が当時で3200点。その後の調査の結果、現在では1万点を超える物が記録されています。これは、たとえば調査

時に「風呂場のタオル17本」と記載されていた資料が、実はタオルといってもひとつひとつに物語があることがわかったからなんです。「これは知事さんが婦人会に来て金一封置いていった。そのとき記念に自分の名前の入ったタオルを置いていった」とか、「これはおばあさんの選歴のときに作ってお祝い返しにあげたタオル」というように、タオルに記載された銘をもとに家族の思い出が一つ一つ出てくるので、増えていったわけです。

こうした聞き取りのほとんどを奥さんに対しておこなったんですが、彼女は家族の誰も知らないようなことをすべて調査者である私に話してくれました。一種のカウンセラーのようなものです。そういうやりとりを通してはじめてある種の共感が得られ、このような展示が可能になったのです。

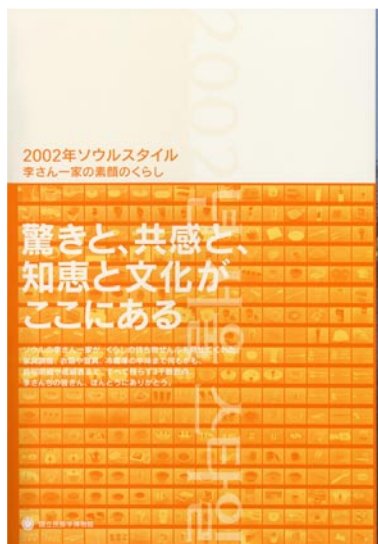
李さん一家は韓国を代表しない

この展示のコンセプトは、韓国の代表としての李さん一家を見せるのではなく、李さんの家族一人一人を見せることに徹するというものでした。

李さん一家は、夫婦と小学生の子供2人、祖母の5人ぐらですが、家族といってもそれぞれ違う世界を背負った人間たちの集まりです。日本でも同じだと思いますが、いまの子供がどんな世界に生きているのかお父さんは知らないでしょうし、お父さんがいま何をやっているか、たいていの家族はあまり知りません。それは日本と韓国の違いという以前に、家族の内部でさえ大きな世代間の違いがあり、夫婦だってお互いにいない間に何をしているかわからないのが現実です。家族はそれぞれまったく独自の世界をもつものと考えて、それぞれの生活空間を表現した展示をおこないました。

『地球家族』と『TOKYO STYLE』

「ソウルスタイル」には、実はさらに前史があります。『地球家族 世界30か国のふつうの暮らし』という本があります。この本は、ユ



特別展『2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔の暮らし』の解説書 定価1890円（税込・送料別 問い合わせ先：千里文化財団 TEL：06-6876-3112）

ネスコのマテリアル・ワールド・プロジェクトがおこなったもので、世界各国の平均的と思われる家庭に行き、「家の中の物を全部出してください」とお願いして写真に収めています。

この本の1ページ目を飾っているのがアフリカの家族です。世界には持ち物100以下でも満足して生活している民族があります。そして最後を飾っていたのが、実は日本なんです。あふれんばかりの物に家族がうずもれているようです。

いくら物があつたとしても、おそらく自分が生きているという実感が得られない、満足した生き方ができないということの現れではないでしょうか。だからこそ、これだけ多くの物に囲まれているのです。だとすれば、物を調べれば、その人が生きている意味に到達できるのではないか――。

このページにあるアフリカの家の生活財調査をしても、ボルネオのロ

ングハウス同様、おそらく共同体全体の縮図は見えてくると思います。そして、そこに生きる個人はその延長上に像をむすんでくると想像されます。しかし、現代社会では、社会も個人もずっと多様で、拡散した首尾一貫しない存在でしょう。冒頭でお話したように、社会の構図や歴史がわかっても、そこから個人が見えてこないのです。その危機感を抱えているからこそ個人の歴史や思い出に着目しているのです。

下の写真は、連続少女殺人事件の犯人Mの部屋の様子です。この写真が公開されたとき、多くの人は「こんな部屋に住んでいるからあんな残酷な殺人を犯した」と思って安心しました。反社会的な人間の証拠としてこの部屋を理解したのだと思います。

その後、都築響一さんが『TOKYO STYLE』という本を出しました。東京に住んでいる、多くはひとり暮らしの人の部屋の様子を撮影した写真

集です。これを見ると、Mの部屋はべつに特別でも何でもないことがわかります。ワンルームが多いのですが、ワンルームと聞くと、蜂の巣のような均質な社会イメージがあぶり出されますが、部屋の中の物を見たら、住んでいる人間の性行はバラバラ、まったく違う人間といってもよいことに気がついたのです。

思い出、物、家庭を、一貫して個人の生き方を通して見つめようと主張してきた佐藤氏。これを前提に、話はいよいよ「ユビキタス社会」へと移っていきます。

個人が豊かにらせる ユビキタス社会を目指して

一般的に「ユビキタス社会」というと、ある意味ユニバーサルなというか、均質なステレオタイプ化された家族像や人間像に基づいた管理社会であるような気がしています。そこに多くの人は危機感を感じてしまうのでしょうか。

物について調べれば調べるほど、ユニバーサルなものから遠ざかっていく、ますますそれをもつ人間の個性が出てくるということは、これまでの話でもわかっていたかと思うます。たぶんユビキタス社会が目指すべきなのは、そういう個を重視する社会ではないかという気がしているんです。

インターネットの普及がもたらしたものはジェネラルな社会ではなく、みんなが情報発信するようになった結果、歴史や社会が多様化してきたということです。それとたぶん近いようなことが、ユビキタス社会でも起こるのではないのでしょうか。

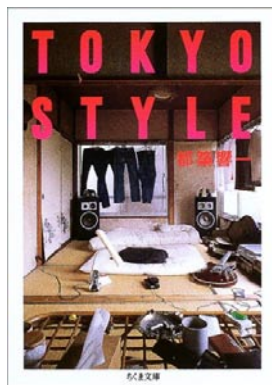
ユビキタス社会は、ユビキタス研究者が考えているような規格化とは反対に、私たち自身を縛っているステレオタイプな家族像や人間像を打ち壊していくような可能性を持っているのではないかと思うんです。それができる社会的インフラだとも思っています。少しでも豊かな人間生活を送れるような形にユビキタス社会を方向づけられたら、そういう思いでこの研究会をはじめました。



『地球家族 世界30か国のふつうの暮らし』マテリアル・ワールド・プロジェクト著 (ピーター・メンツェル代表) 定価1988円(税込) TOTO出版(1994)



M's Room (1989)



『TOKYO STYLE』都築響一著 定価1260円(税込) ちくま文庫(2003)

質疑応答

①

関根康正 ユビキタスにつなげるところが全然わからなかったんですが、もう少しわかりやすく説明してください。

佐藤浩司 ユビキタスは、たとえば住宅のレベルでいうと、住宅内にある全ての物にタグを付けて、管理していこうという発想だと思います。全ての物を管理してどうするかというときに、そのベースにある人間とか社会とか家とか家庭といったイメージが、ユビキタスを開発する側ではきわめてステレオタイプにとらえられているようです。ユビキタスがめざすのは、人間行動をパターン化して自動化に寄与したり、在庫管理に役立てようという発想です。これでは、文具屋の店頭にある鉛筆も、大切な友だちからもらった鉛筆も同じ価値しか与えられていません。なぜ鉛筆をいくつも持ってしまうかということは、鉛筆という機能にだけ注目してはわからない。しかし、一つ一つの物に同じ情報を与えるのではなく、ユビキタスは、ある物についての情報が10人いれば10人違うということを受け入れられるようなシステムであるはずなんです。だとすると、ユビキタスを極めれば極めるほどステレオタイプな家族や住宅というものが崩れていくだろう。崩れる可能性をそこにはらんでいるだろうということなんです。

関根 先ほどよりは少しわかりました。



須永剛司 李さん一家は、自分の思い出や歴史がこもった物を全部持って行かれてしまって、大丈夫なんですか？

佐藤浩司 思い出喪失症ですね。確かにそれはあります。私の調査は、家族5人はまったく違うという前提に立っていたんですが、彼らは家族という幻想の中に生きていたんです。家族の思い出を大切にしながら。それが物がなくなったことによって、一人一人が直に向き合うようになったんです。そうすると家族の中に不協和音が生まれて、しばらくの間大変でした。

でも結局また物を買ってそろえて、新たな思い出をつくっていくし、展示自体が一つの家族の共有する思い出になっていたようです。というのは、いま彼らの家に行くと、これまで家族写真が貼ってあったところにソウルスタイル展のポスターとか写真が貼ってあるわけです。こうして家族は一種の新しい歩みを始めることができたんだと思います。とくに奥さんは少なくとも今でもソウルスタイルの世界に生きています。それについて僕はちょっと悪いことしたなと思っているんですが、本来捨ててもいいと思っていた物まで、捨てられなくなっちゃったんです。

須永 その後ですか？

佐藤浩司 そうです。つまり、その当時どうでもいいと思っていた物でも、聞き取りを通して新たに認識していくようになります。こうなると捨てられないんです。今までゴミだと思っていた物が捨てられない物になった世界というのは、それはたぶんすごく恐ろしいのではないのでしょうか。

須永 そうするとやっぱり何か尋常ならざる状況が起きたということですね？

佐藤浩司 起きています、今でも。実は先日、韓国で講演したのですが、それもこの奥さんが仕掛け人です。彼女にとってはすごく大きな意味を持っていることが、韓国社会で受け入れられていない、そういうことがまだ理解されていないということについて非常に危機感を持っているんです。日本ではこれだけ理解者がいても、韓国では「なんで普通の家の物を」っていうのがまだわからないことが多いので。

須永 日本の家族では調査しないのですか？

佐藤浩司 それはこの研究会で最終的にそこに持って行けたらと思っていますが、予算の問題もあるし、協力してくれる人がいるかという問題もあります。

野島久雄 これに応じるのは大変ですよね。調査はしたいんですけど。



2002年12月5日～2003年8月22日、名古屋・東京・大阪のINAXギャラリーで巡回展示された『普通生活 2002年ソウルスタイルその後——李さん一家の3200点』の解説書。佐藤浩司・山下里加著 定価1545円（税込） INAX出版（2003）

Presentation②

思い出研究の動向 ：なぜ、いま「思い出」なのか――

speaker：野島久雄（NTT マイクロシステムインテグレーション研究所ユビキタスインターフェース研究部）

profile：http://www.nozy.org/

ユビキタスの研究者たちは、いったいどんな夢を思い描いているのだろうか。パソコンや携帯電話の例を出すまでもなく、新しい技術が人々の暮らしや関係性までも変えていく今、やるべきこと、考えておくべきことは何だろうか。その手がかりとなるキーワードが「思い出」なのです。

工学系の研究者が圧倒的に多いNTTの研究所に20年前、2人目の心理学者として入った野島氏。最先端のテクノロジーで夢を語る工学系研究者に「待った！」をかけます。

先走るテクノロジーに 人間の視点を

ユビキタスという考え方は1990年代に出てきて、最近とりわけ流行しています。あらゆる物や場所に小さなコンピュータをつけ、それぞれが情報やりとりすることによって人々の行動を支援する環境を目指しています。これをICタグ（別名RFID＝Radio Frequency Identification）と各種センサーといったITテクノロジーを使って実現していこうと、いろいろな研究が始まっています。

一人暮らしの高齢者支援住宅

アメリカのジョージア工科大学に「Aware Home」というプロジェクトがあります。ごく普通の家の中に様々なセンサーやカメラなどの道具を置くことによって、人々の生活を支援しようという研究です。

このプロジェクトのテーマの一つが高齢者の支援です。アメリカも高齢化社会になり、特に一人暮らしの高齢者がふえています。その人たちの支援するための技術がいろいろ考えられているわけです。

たとえば、体調が悪くなり家の中で倒れると、すぐに発見して手助けしたり、あるいは家事をしている際に物忘れしたら教えてくれるなど、

技術的支援があれば高齢になっても慣れ親しんだ家で生きていくことができます。それを彼らは「Aging in Place」と呼んでいます。



▲1998年よりジョージア工科大学で行われている「Aware Home Project」。どのようにして「家」が人の活動を察知し、家の中で人の行動を支援できるかを研究している。

すべての情報を記録・保存する

日本でも、ICタグを使って生活支援をしようという工学系の研究者はたくさんいます。彼らと話すと、いろいろな夢を語ってくれます。たとえば、家を出るときに、今日やらなくてはいけないことを思い出させてくれたり、忘れ物があったら教えてくれたり。それは家の中の物すべて、壁などにも最初からタグを埋め込んでおけばすぐにも実現できると言えます。

でも、そもそも家の中に物って一体いくつぐらいあるの？と彼らに聞いてみると、たいていの人が答えることができません。自分が一日どれくらい物とインタラクションし、持ち歩いているのかということなど見当もつかない。それはやはりまずいと思います。

ユビキタス社会とは、実はICタグなどの技術によってすべての物の情

報がデータベース化されるということです。これは尋常ならざることなんです。「2002年ソウルスタイル」展を経験した李さんの奥さんは、すべての物にいろいろな思い出や記憶がくっついていると気づいた結果、物が捨てられなくなったといいます。ところが、今ユビキタス関係の研究者たちが目指していることのひとつは、まさにいま言った尋常ならざること、つまり自分が体験したことをすべて記録に残す、自分が持っている物すべてをデータベース化するということなんです。そうしなければ、彼らが語る夢は実現しません。

ところが、現実は待っていてくれません。自分の体験を全て記録するという試みを、実際にやり始めている人が出てきているのです。

体験を記録、保存するのは 何のためか

美崎薫「記憶する住宅」

美崎薫さんをご存知でしょうか。彼は「記憶する住宅」というコンセプトで、家の中に膨大な量の情報を保存し続けている人です。

自分が目にした物すべてを段ボール箱に入れてスキャン会社に送ると、1ヵ月2万枚程度の画像ファイルができます。2004年春ごろで約60万枚のファイルがあり、2、3年のうちに300万枚になるそうです。そのころには、今まで目にした物はほぼ全部ファイルになっているというわけです。

彼はもともと記録することに興味

を持っていたようです。小学生くらいから毎日日記をつけているし、大きくなってくるとその日何をして誰と会ったかということも全部記録に残しています。90年代以降になるとPDAやデジカメが出てきて、デジタル化された情報も全て残っています。読んだ本のページもどんどんスキャンします。これをどうすると思いますか？

仕事で使うモニタの隣に、専用モニタをおき、こうしてできた画像ファイルを2秒に1回表示しつづけるんです。仕事しているときだけつけていると、60万枚の画像がほぼ1カ月で1周するそうです。一体どんな気分なのでしょうか。美崎さんは、「“今”がずっと続いているみたいだ」と言っています。

ふつう、過去の記憶はだんだん薄れていきますが、こういう形で画像が出てくると、それも“今”みたいな感じになってくる。そのように記憶が薄れないでいることが人にとってどのような意味を持つのかはまだわからないのですが、そういうことをやろうと思えば可能になってきて

いる時代だということです。

一生分の体験が記録・保存できる

1990年代以降、コンピュータの進歩もあり、記録や保存、表示の技術が非常に進んできました。

下の写真は我々の研究グループが今年2月に行った体験を記録する実験の様子です。被験者に浅草の花やしきや仲見世を歩いてもらったのですが、目のところにカメラをつけて見たものすべてを記録し、服には各種のセンサーをつけて、心拍の変動や歩数、体の位置の動きなど、生理的データも取りました。肩にはGPSをつけて、どこをどう移動したのかわかるようになっていました。見た目はちょっと異様ですが、いろいろな情報入力機器を使って体験を記録するということが、技術的に可能であるということです。

このようにして、人の一生を電子的に保存することも可能になってきました。奈良先端科学技術大学院大学の福原知宏さんらの研究グループでは、80年分の映像情報、つまり人が生涯を通じて見聞きする情報は

電子的に記録し蓄積できると言っています。その映像情報の量は58ペタバイト。ペタという単位はメガ、ギガ、テラときてその上がペタになります。今は1テラバイトのハードディスクがおおよそ10万円。10年もしないうちにペタは現実的なサイズになるでしょう。生まれたときから頭にカメラをつけている人が80才で亡くなるまで、すべての映像記録が一般の人でも買える記憶装置に蓄積できてしまうということです。

アメリカ国防総省が研究に着手

実は、体験記録の研究は、いまちょっとブームになっています。

2、3年前にアメリカ国防総省が、人が体験したことをそのまま記録に残せるシステムの研究プロジェクトを公募しました。それがライフ・ログ・プロジェクトです。ところが、これは今年に入って中止になったと聞きました。それはなぜか。

国防総省が当初考えていたのは、実際の戦闘を含めて、兵士がいつ、どこで、どのような状況で何を体験したのかを全部記録すれば、あらゆる支援が可能になるし、万一亡くなくてもあとで記録を見ることができるといことでした。ところが、これが日常生活に応用されたらプライバシー侵害になるのではないかと、ものすごい批判が来しました。

ただ、問題はあるにせよ、人々の生活をそのまま記録しようという試みにはある種の夢があります。問題点を解決できれば、さまざまな支援が可能になるし、もしかしたら今までになかった暮らしやコミュニケーションのスタイルを創出できるかもしれません。だからこそ、ライフ・ログという言葉は非常に広まったんですね。

マイクロソフトも参入

同様の研究は他にもあります。マイクロソフトのゴードン・ベルが進めている「マイ・ライフ・ピッツ」は、自分の生活にかかわる情報をすべてパソコンに保存し、それを使える形にしようという研究です。

今や様々な情報がパソコン経由に



▲美崎さんが保存している画像データ。



▲カメラや各種センサーなどを身につけて、「体験」を記録する。



◀「記憶する住宅」。手前のモニタで仕事をし、左側にあるモニタに、保存された画像データを2秒に1枚ペースのスライドショーで映し出していく。

なっています。メールはもちろん、IP 電話もパソコンを通り、デジタルカメラで撮ったものはパソコンに保存できます。音楽も映画もダウンロードして視聴するとなると、膨大な量の情報がパソコン経由になります。マイ・ライフ・ビッツは、パソコンを統一のインターフェースとし、情報検索を支援しようという試みです。

実際に人々がどんな情報を自分のパソコンに持っている、日常どのような情報を入手し、どんなテレビやビデオを見て、メールはどのくらいやりとりしているのか、2001 年の 1 年間に観察した調査結果が出ています。その時点では大した量ではなかったのですが、その後の調査ではどんどん増えてきているようです。

マイクロソフトでは、マイ・ライフ・ビッツがここ数年の大プロジェクトだと認識していて、去年の秋にビル・ゲイツが「将来のウィンドウズにはマイ・ライフ・ビッツで検討してきた様々な技術を導入する」ということを公言しています。

一方、アップル社でも社長のスティーブ・ジョブズが、来年発売されるマック OS の新バージョンに、パソコンの中に保存している各種の情報を瞬時に検索できるシステムを提供すると言っています。

このように、今やパソコンの世界でも体験を記録し、保存・活用する技術開発が戦場となっています。

記録し、保存することの問題点

先 先ほどもお話したように、アメリカの国防総省のライフ・ログ・プロジェクトが頓挫したのは、プライバシー問題が起こったからです。頭にカメラをつけて生まれてから死ぬまでの映像を撮影し保存できると言っても、本当にそんなものを一日中つけて生活できるのか、保存したものは、いつ、だれが、どのように利用するのかということにかんしては、まだ社会的な合意がありません。

また、保存先となるメディアの問題もあります。右上の写真の中の右側に写っているのは、懐かしい 8 イ

▶テープ、歴代フロッピーなどの記憶メディアとくらべて、写真中央のロゼッタストーンはなんと堅牢なことか。



Rothenberg, J. (1995) デジタル文書をどのように残すか、日経サイエンス、25(3)、110-118. より



◀思い出深い子どもの工作。今まではやむなく捨てていたものでも、すべてデータとして残っていく社会は、人間にどのような影響を与えるのだろうか。

ンチのフロッピーです。片面 230 キロバイトという最初期の記憶メディアですね。今 8 インチのフロッピーを読める機械なんて手に入りません。それに比べると、このロゼッタストーンのなんと堅牢なこと。要するに、デジタル情報は非常に危ういということもあるわけです。

思い出はどこへ行くのか

我々は膨大な物を所有し、もはや扱いきれなくなっています。上の写真は中学 2 年になるうちの娘が小学 4 年の時に作った恐竜です。娘はもう捨ててもいいと言いますが、親としては捨てるに忍びない。こういうものはどうしたらいいのでしょうか。みんな困っているはずなんです。

私の家の場合、たいていのものは結局捨てるのですが、今はデジタルカメラで撮ったり、3D データとして保存する技術もあります。しかし、そこまですてデジタル化することが、本当に必要なのでしょうか。人間の記憶や思い出が持つ意味をあらためて問うていく必要があると思います。

すべてを覚えている必要が本当にあるのか

超常記憶の研究

美崎薫さんのように今 60 万ページぐらいの画像ファイルがあり、小学校 4 年ぐらいから以降のノートや読んだ本などがすべて残っているというのは、エクストラオーディナリー・メモリ、つまり超常記憶を持っているということと同じです。

ロシアの心理学者、ルリアが『偉大な記憶力の物語』という有名な本を書いています。いったん見たものは決して忘れないという記憶力を持ったロシア人の話です。この人は「普通の人と自分は違うらしい」と感じ、ルリアのところへ相談に行き、超常記憶を持っていることがわかります。ルリアはそれからのち 2、30 年にわたってずっとこの人を追いかけることになったのです。

ルリアはいろいろな課題を出すのですが、ある日、意味のない詩のようなものを「これを覚えてください」と言います。10 分後に確認したら完璧に覚えている。そして「もうこれは結構です」と言って、15 年後に「実は昔、あなたにある詩を見せましたけれど、覚えてますか？」と聞くとすらすらと出てくるんです。

心理学では超常記憶を持った 10 人弱の人を対象にした研究がありま

すが、たいていの人が実はアンハッピーな生涯を送っているんです。まっとうな生涯を送れた人は、イギリスのエイトキンという大学教授1人。やはりすべて記憶できることはよいこととは限らないのです。

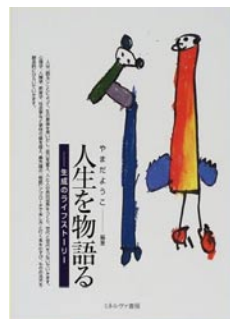
我々は情報を捨てるために「忘れる」という仕組みを持っていて、それをうまく使っているからごく普通の日常生活を送れるわけです。だからもしすべて情報を残せる仕組みができて、そのままでは役に立たないものになる可能性があります。これはやってみないとわからない。けれどもそういった研究をしないで、ただ単に一生の画像を残すわけには行かないと思うのです。



『偉大な記憶力の物語 ある記憶術者の精神生活』アレクサンドル・ロマノヴィッチ・ルリヤ著 天野清訳 絶版 文一総合出版 (1983)



『質的心理学研究』無藤隆他編 No.1～3 各定価 2940円(税込) 新曜社 (2002-2004)



『人生を物語る—生成のライフストーリー』やまだようこ著 定価 3150円(税込) ミネルヴァ書房 (2000)

覚えていること、語ることの効用

心理学では、記憶は長い歴史のある研究分野で、TUV や XEF など3文字の無意味綴りを人がどういう風に覚えるか、というようなところから研究が始まりました。それが最近「エブリデイ・メモリ」といわれる、ごく普通の生活場面での記憶にかんする興味が高まっています。

実は1930年代からその流れはあったのですが、1980年代以降に日常場面での記憶は、実験室での記憶とは違うのではないかという話が出てきました。とりわけ自分の過去にかんする記憶、自伝的記憶の研究は非常に盛んになってきています。それは、自伝的記憶を活用することで、いろいろなよいことがあるということがわかってきたからです。

質的心理学とライフ・ストーリー研究

京都大学のやまだようこさんが、以前から「人生を物語る」という語りにかんする研究をされています。語ることによって自分をどう表現し、また語ることによって生活を変えて、人とつながって、ということを研究されています。このライフ・ストーリー研究が心理学の分野ではここ数年流行しつつあります。この研究会では、できればこの分野とも話をつなげていければと思っています。

こうしたライフ・ストーリー研究は、質的心理学という新しい研究方法の一つです。

1990年代の半ばから出てきたもので、今までのように大量のテストを行って統計分析する「量的心理学」ではなく、個人の体験に基づく質的研究をやっているというものです。当初は研究会だったのですが今年9月に質的心理学会となりました。

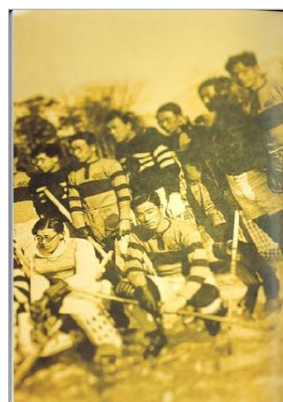
このように個人の体験に対する興味が高まり、体験を記録に残すというのがいいことだという動きも出てきています。これまでは無名の人は無名のまま人生を終わっていましたが、自分のことを公に語りたい人が非常に増えてきました。もともとそういう人は潜在的に多かったのかもしれませんが、それが顕在化してきていると言ってよいでしょう。

百歳回想法

高齢者を対象に、特に初期アルツハイマーに対するリハビリの一つとして、昔話をしてもらうことによってその人のメンタルな状態を改善していこうとする「回想法」という治療法があります。1980年代後半にイギリスで始まり、1990年代前半に日本に入ってきました。

それまでは、リハビリ専門病院や老人ホームでも、高齢者が「昔はね」「私が若い頃は」と昔話をすると、現実世界に不適応というレッテルが貼られていました。それが、高齢者に自分自身を語ってもらうと、さまざまなメリットがあるということがわかってきたのです。

『百歳回想法』という本があります。著者の黒川由紀子さんが100歳近くの人を5人くらい集めて昔話を



『百歳回想法 ソトコ classics』黒川由紀子・文 小野庄一・写真 大塚宣夫・監修 定価 3885円(税込) 木楽舎 (2003)

してもらい、その記録をまとめたものです。よぼよぼのおじいちゃんとおばあちゃんが実は、早稲田大学ラグビー部でばりばりやっていたとか、キャリアウーマンとして40歳過ぎるまでずっと仕事を続けていたとか、あるいは80歳くらいまで国語教師やっていたので、論語なんていくらでも空でいえるとか。そういう話を聞くと、介護者の方に尊敬の念が生まれるのです。そうなるコミュニケーションも改善されるし、介護のクオリティも向上します。介護される高齢者の精神状態も非常によくなる。そういう様々なよいことがあることがわかって、回想法は非常に注目されています。

オーラル・ヒストリーへの関心

思い出や記録することに対する興味は心理学だけでなく、政治学の世界でも高まっているようです。それがオーラル・ヒストリー研究です。

オーラル・ヒストリーとは、「個人や組織の経験をインタビューし、記録を作成して後世に伝える」というものです。そのけん引役となっているのが東京大学先端科学技術研究センター教授の御厨貴さんです。

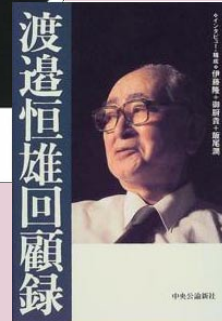
彼は政治学者ですから政治家にインタビューをし、どういうことを考え、何をして、ということ全部話してもらいます。インタビューする側は特に批判や論争をせず、しゃべったことをそのまま記述します。内容については別のところでクロスチェックを行うという仕事です。

もともと政治学ではこのような仕事は研究テーマではありませんでした。それが1990年代になって、後藤田正晴や渡邊恒雄などの回想録、あるいは石原信夫という首相補佐官を長年やっていた人に御厨さんがインタビューをします。そこから政治の中ではどのような決断がなされて、それがどのような要因でどんな影響があり、そこが個人の決断にどのように影響したかということの研究する世界が開かれたんです。

語れる社会環境が整ってきた

日本はこういうことをあまり語れ

『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』御厨貴著 定価777円(税込) 中公新書(2002)



『渡邊恒雄回顧録』伊藤隆・御厨貴・飯尾潤著 定価2415円(税込) 中央公論新社(2000)

『情と理—後藤田正晴回顧録(上)』後藤田正晴著 定価1785円(税込) 講談社(1998)

『首相官邸の決断—内閣官房副長官石原信雄の2600日』石原信雄・御厨貴・渡邊昭夫著 定価840円(税込) 中公文庫(2002)



る社会ではありませんでした。政治家はすべてを墓場まで持っていくもの、それが正しい政治家だと思われてきました。官僚も同じです。

御厨さんたちは官僚への聞き取り調査もやっていて、たとえば昭和30年代に産業育成のための法律を作ったんですが、それは一体どういう理由で、誰が主導してどのような人たちがそれに関わったのか、そして、どうしてそういうような戦略をとったのかということの聞き取りをしています。

90年代前半に自民党が野党に落ちたときがありました。今までは自民党側にくっついていれば説明ナシでも体制が維持できていたのが、自民党の政権がひっくり返ったときにその段階で「なんでこんなことやったんだ」と言われるようになる。そのとき、それが説明できないとやはりまずいということに官僚側も気づき始めました。彼らが語るようになったのはそのような流れがあったからです。

今まで日本の社会は自分のことを語らなくても、組織の中の役割の中に埋もれて、その組織の要求することを黙ってやっていたらそれでOKだったわけです。しかし、もはや社

会情勢としてもそうではなくなってきたということです。

御厨さんの仕事は政治家や官僚が対象ですが、先ほども話したように、ごく一般の個人も自分を語るようになっていくし、それを社会も許しているということがあります。過去の記憶をどう扱うかを考えるうえで、知っておきたい現実です記憶をどう扱うかを考えるうえで、知っておきたい現実です。

ここまでは、個人の記憶や語りにかんする研究や社会の現状について報告してきました。ここからは、いよいよ家庭にあふれている「物」や、それにまつわる記憶や思い出に話が進みます。

「家庭」「物」「思い出」にも新しい流れが

思い出ブーム

1990年代後半以降、社会的にも「思い出」が非常に盛り上がってきています。

最近見て感動したのが『クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレツ!オトナ帝国の逆襲』という劇場用映画です。これは子どもが見てもわからない。大人にウケるといふアニメで

す。ストーリーは 20 世紀博というテーマパークが開催されて、大人はみんな懐かしい世界に行っちゃって、子どもなんか無視しちゃうという世界を描いています。大人だけの楽しい世界を作って時間を止めてしまう、恐るべきオトナ帝国化計画だったというお話です。

この中で、思い出というものがわれわれの感情にどれだけ大きく影響しているかを、非常にうまく語っているシーンがあって、これはある年代以上の人が見ると必ず涙するというつくりになっています。ごらんになっていないかたは、ぜひ。

一昨年辺りから、右の写真にある「タイムスリップグリコ」のように、いろいろな形での昔懐かしい商品が復刻発売されるようになりました。僕もこれにずいぶんつき込みましたが、こういうものもずいぶん売れているようです。

申間努さんの『日曜研究家』や、NHKの「プロジェクトX」もそうですが、昭和30年代ブームも来ています。これは、昭和30年代ぐらいから商品が大量に流通するようになり、それが人々の記憶や映像だけでなく、現物が残されていることも多くなったからだと思います。また、このころに子ども時代を送った人が40才代以降になり、会社の中で偉くなって、いろいろな意味で決裁権を持つようになったので自分の好きなことをやりやすくなったということもあるでしょう。子どものころの夢をかなえたり、懐かしさに浸ったりということが趣味や遊びとして出てきています。

変わる家族と思い出

さて、思い出は、家庭や家族の話と密接に結びついていることは、皆さんも実感できると思います。

今、家を考えるうえで興味深いのは、やはり家庭とか家族が持っている昔のイメージが崩れてきているということです。しかしそれをどうやって戻せばいいのか、あるいはまたは戻すことがいいのかどうかということにかんしては、まだ結論がありません。



『クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶモーレッツ! オトナ帝国の逆襲』2001年公開劇場版 DVD/VHS 各3999円(税込) 2002年発売 バンダイビジュアル



◀タイムスリップグリコ「青春のメロディチョコレート」関東では2003年8月5日発売 江崎グリコ



『日曜研究家—昭和B級文化の記録 3号 おやつ特集号』申間努著 絶版 日曜研究社(1995)

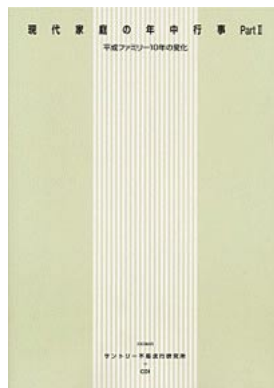
この研究会のメンバーでもある加藤ゆうこさんがされているCDIの「現代家庭の年中行事 Part II」という調査でわかったことですが、伝統的な年中行事はだんだん減っていく一方だと思われていたのが、場合によっては増えているものがあります。町や神社のお祭りもどんどん減っていくだけではなく、むしろ復活するものも増えてきているということがあります。家族や地域社会の絆が薄れているからこそ、連帯を強めるために行事に取り組んでいるという可能性があるのかもしれませんが。

家族の問題は小説の中でも昔から取り扱われてきました。たとえば重

松清さんはずっと家族のあり方にかんする話を書いています。『トワイライト』という作品は、小学校卒業のときのタイムカプセルをほりだしたことをきっかけに、昔を振り返ることによって今をとらえ直すということが題材になっています。

シカゴの家庭の生活財調査

この研究会の代表である佐藤浩司さんがソウルスタイル展を通して李さん一家に聞き取り調査をしましたが、やはり「物」が我々に及ぼす影響は、非常に大きいことがわかります。しかし、人が物をどのように扱っているのか、ということにかんす



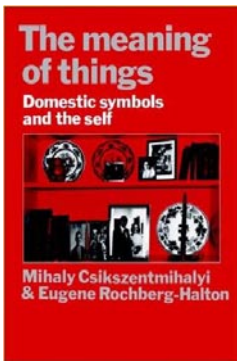
『現代家庭の年中行事 Part II —平成ファミリー10年の変化』サントリー不易流行研究所+CDI 頒価5000円(2003年6月発行 問い合わせ先: CDI TEL: 075-253-0660)



『トワイライト』重松清著 定価1800円(税込) 文藝春秋社(2002)

る研究は実はまだまだ少数です。

日本では、阪神淡路大震災が起きたとき、人々がどのようなものを失って悲しかったかという研究がありますが、最も有名でおもしろい研究は、チクセントミハイというアメリカの心理学者が行ったシカゴの80家庭を対象にした調査です。その調査結果は1980年に『The meaning of things』という本にまとめられています。家の中のあらゆる物に対して、一体どうしてそういうものが置かれて、それはどういう意味があるのかということ、インタビューを中心に行った研究です。この研究会でも、日本の家庭で生活財調査ができないかと考えているところです。



『The meaning of things : Domestic symbols and the self』 Mihaly Csikszentmihalyi, Eugene Rochberg-Halton. Cambridge Univ. Press. (1981).

アーカイブ＝思い出

個人の記憶、思い出、物、家庭といった話から、またテクノロジーにもどりましょう。とは言っても、思い出の話です。

工学系の研究者のあいだでは、「アーカイブ関係なら国から研究費が出

やすい」と話題になっているようです。たとえば、国立国会図書館もウェブ・アーカイビング・プロジェクト（WARP）というインターネット上にあるデジタル情報の保存事業を進めています。というのは、図書館関係者は現在の状況に大きな危機感を持っているからです。

昔は出版された本を保存していれば、世の中の知識は保存できたと信じてきたのですが、インターネットの普及で、これが脅かされているのです。

本は読まないけれどもウェブは見ている、新聞はとらないけれどもasahi.comにはアクセスするという人が増えてきています。社会の知のあり方が本や新聞ではなくインターネットのウェブになってきているということです。しかし、ウェブ上の情報は非常に不安定で、消えてしまったり、いつの間にか中身が変わってしまいます。

そういうわけで、図書館学の人たちは電子情報をどう扱うかについて、様々な検討を行っているところです。

「思い出」もアーカイブの一種だと考えると、家族・家庭という概念が壊れつつある今、それを再構築するための一つのキー概念として「思い出」が出てきているのも自然な流れだと思えます。

思い出工学、そしてこれからやるべきこと

ここまで、思い出にかんして工学、心理学、実際にやっている人たちの話、そして社会的な需要もあるけ

れと、だからといって危機がないわけじゃないということも含めて自分なりのマップを描いてみました。このような話が私自身の興味の中にあり、「思い出工学」というものを提唱しています（詳しくは『<家の中>を認知科学する』を参照して下さい）。

ユビキタス関係では、人がどのようにして家庭の中で生活しているかというような形で行動しているかということをもっと詳しく分析するための枠組みとして、佐藤浩司さんと一緒にソウルスタイルのデータを使って分析しているところです。

私が今できればこの研究会を通してやっていきたいと思っていることの一つは、やはり「思い出はどういう意味があるのだろうか」を明らかにするという事です。現物を残したり、映像として記録したり、思い出はこのような現実に対応している必然性はないと思っていますのですが、それならばリアルなものを保存する意味は一体どこにあるのだろうかということもあります。一体思い出はどういうことなのかということをもっと少し詰めなくてはいけないと思っています。

また、最初の話に戻りますが、ユビキタス工学の研究者と建設的な交流をしていくための一つの手がかりを、こういうところから得ていく必要があるだろうと思っています。いろいろおもしろいネタはあるはずなので、そういうことも含めてこの研究会を一つの手がかりにできればおもしろいと思いますので是非よろしくお願いします。



▲国立国会図書館ウェブ・アーカイビング・プロジェクト <http://warp.ndl.go.jp/>



『<家の中>を認知科学する 変わる家族・モノ・技術』野島久雄・原田悦子編著 定価 3780 円（税込）新曜社（2004）

質疑応答

②

オーラル・ヒストリーについて

安村通晃 日本には柳田国男がいるし、過去の日記を通して政治家の活動を知ったり、アイヌの人たちのような口承というのがあったはずですが、いったん途絶えて、また再ブームになっているという状況なのでしょうか。オーラル・ヒストリー学会までできているみたいですし。

野島久雄 昔から日記やインタビューの記録などを対象にして、明治や大正の政治家の分析はずいぶんされているんですが、信用できないものが多いようです。たとえば新聞や本に載っているインタビュー記事は、本当にしゃべったのかどうかすら疑わしいものがずいぶんある。また、日記は基本的には自分の嫌なことは書かないので、客観的なデータとするには非常に弱いということがあります。民俗学では、そういう様々なデータを使って、政治家がどういうことを考えていてどのような決断をしているのか、あるいは民衆でいえばなぜこのような祭りができたのかといった研究がなされていたわけですが、それをもう少し語るもの自体を客観的なデータとして扱い得る仕組みをつくるというのが御厨さんたちの試みです。

昔は官僚も書類をどんどん捨てていたのが、今は残さなくてはならないと思っています。政治家も後世に自分のやったことに対する評価を仰ぐという意味で自伝を書くようになってきました。やはりいろいろと変わりつつあるのだと思います。

安村 おそらく記録する人がふえたり、記録技術が進んできたということがあるかもしれない。

野島 それもあると思います。アメリカ大統領はあとで必ず自伝を書くことになっています。クリントンも最近出しましたが、大統領は基本的に任期が終わると自分の資料を残しておくのが伝統なんです。日本にはない伝統です。しかしそれが少し変わりつつあって、それを残しうる世の中になっています。昔やっていたような日記研究や伝記研究とはちょっと違う形になりつつあるのだと思います。だから御厨さんたちは新たなライフ・ヒストリー研究の方法論を確立すべきだと言っています。その方法論を考える際に、われわれがやっているような体験記録のテクノロジーが役に立つのではないかとということで、つながりができつつあります。

佐藤浩司 これまで民族学が対象にしてきたのは、いわゆる無文字社会や未開社会など多くがオーラル・ヒストリーの世界です。だから、個人の記憶をインタビューで記録することはごくあたりまえにおこなってきました。ただ、それはあくまである社会の歴史を解明するための手段であって、チャーチルや渡邊恒雄の自伝にしても、ここでおこなわれているオーラル・ヒストリーはわれわれの歴史に到達する手段だと思えます。しかし、最近流行っているオーラル・ヒストリーは、むしろ歴史で保管されない自分についての歴史ではないかと思います。以前だったら、いったい誰がそんなものに興味をもつんだという世界。だとすると、インターネットの自費出版とか、そういう話と結びつきますよね。

野島 そうですね。御厨さんの話は方法論を検討しているのでおもしろいと思えます。

佐藤浩司 関根さん、人類学者としてオーラル・ヒストリーについて何か一言ありませんか？

関根康正 今の人類学の文脈でいえば、近代以前は無文字社会という、かなり記憶中心の世界が広がってい

た。そういう記憶のあり方というのは、文字で記録するのものを覚えるみたいな、あるいは文字に書き付けて要約するとか、記録のあり方が近代とその前で大きく変わったんじゃないでしょうか。今日のお話聞いていると、その次の時代が来つつあるのかなという感じを受けました。

我々が学校教育で何を勉強したかという、文章を読んで要約するようなことばかりです。ですから要約の力はかなりあると思うんです。だけど、そういう力が前近代で有用だったかというところからわからない。

イスラムにはウラマー（アラビア語で学者を意味するアーリムの複数形。イスラームに固有の伝統的諸学を修得した人々をさす）という、イスラム法やコーランなどを記憶している人たちがいます。その人自体が記憶の固まりで、論争でも記憶と記憶同士がぶつかって、すばらしい言葉をパッと発言した方が勝ちとかね。これは『記憶の帝国』という本で前田雅之さんが指摘していることですが、近代の要約世界と違い、前近代の抜き書き世界では、部分をパッと出すと、それだけでウラマーの全体としての力が表現されるわけです。

だからユビキタス社会になり、何でもタグが付いて、何でも枚挙していったら、ある意味で前近代のウラマーの頭の中みたいになっていくのか。しかも、ウラマーという特殊な人間（特殊だから価値があるわけですけど）がテクノロジーによって大衆化するわけですね。そうしたらあまり価値ないわけでしょう。それでは差異化ができないから、そうすると今度はどんなもので差異化していくのかわからない。

要約の世界から次の段階に我々は何を変容させていくのか、知のパラダイム転換を検討し始めているという印象を持ちました。



『記憶の帝国』
【終わった時代】の古典論』前田雅之著 定価 3990円（税込）右文書院（2004）

佐藤浩司 ユビキタスはまさに差異化のための技術だと思っているんです。そもそもオーラル・ヒストリーは歴史を積み重ねれば積み重ねるほど一つの歴史になるのですが、今我々が直面しているのは、積み重ねれば積み重ねるほど崩れてしまうような歴史です。だからこそ一つの歴史で収斂されない自分に関心があるのであって、目指している世界が違うと思う。

我々が無文字社会の歴史なるものをとらえようとするときに、それはたとえば10人の人の話を聞けばより正確にある無文字社会の歴史がえられると思ってやるわけですね。無文字社会といわれている人たちは、自分がいかに特殊な歴史を持っているかなんてことには関心を払っていません。ウラマーに正しいか正しくないかを言ってもらえればそれで満足なわけだから。それは大きな質的な違いがある。そこで目指す社会が、やはりウラマーの社会のようなものをユビキタスが目指していると思うとすると、それはちょっと違うと思います。パラダイム・シフトという問題ではないと思うんです。

関根 記憶が意味している内容は、我々が今普通に考えているものと、必ずしも同じではないと考えた方がいいと言っているのです。言葉はその時代の知全体の中で息づいていますから。大きくパラダイムが変われば、記憶、歴史という言葉は意味が変わるわけです。転換期にかかっている議論だからこそ、よけいにそこに注意しないと非常に不正確な議論になるんじゃないかな。



膨大な保存情報を整理し、意味づけすることについて

安村 野島さんの話でおもしろくて象徴的だと思ったのは図書館の話です。図書館は今まではISBNとかISSNをきちんとつけられたものが登録されます。今回のWARPでやろうとしているシステムもやはり登録さ

せるんですね。それって結構矛盾しているんじゃないかと思うんです。インターネットは誰もが発信してやっているので、誰かがおもしろいと認めたものだけを載せようとしているんだけど、ネットでおもしろいのは、やはり誰もが発信者である点だと思うんです。誰かエスタブリッシュされた人が申請して、それをまた委員会が審査するというナンセンスなことを今やろうとしている。でも逆になんでも拾おうとすると、それはもうとんでもない。世の中が発信しているのと同じ分を保存して、しかももっと大変なのはそれを整理しなくちゃいけないんですね。だからそこが、今日の話の中で、図書館とWARPというところがユビキタス時代の変換期を象徴しているような話と思いました。

もう一つ、記録したあとどうするかということがありますよね。美崎さんのもすごく苦労して、しょうがないからただ見て、過去日記をつけているわけです。やはりポイントは、どうやって注釈をつけたりという編集を労力かけずにやるかということだと思います。体験を映像で記録するといっても、それを他の人が見てもおもしろさがわかりません。一緒に経験した人はわかるんだけど、それ以外の人にとってはほとんど意味がない。コメントやタグをつけるといった編集作業を誰がどのようにやるかというのが工学的な支援を考えると重要だと思ったんです。

野島 そうですね。デジカメで何百枚も撮るのに結局二度と見ることがない、というのはよくあることです。それを「箱根旅行」という形でひとまとまりのアルバムにしたり、あるいはウェブページを作ったり、そこにもものすごく手間がかかる。そこをどうするかというのは考えるべき問題です。

佐藤浩司 やはり、美崎さんはユビキタス環境を利用して自分の個性を発揮している、いわば自分自身の差異化に最も挑戦的な人のひとりです。みんながやるようになると、た

ぶんやらないと思います。また別なことを求めていくのでしょうか。だから彼のしていることにとらわれすぎるのは、ちょっと方向が違うかもしれません。すごくおもしろいことをやっているのは確かですけど。



誰のための思い出？

安村 思い出や自伝、オーラル・ヒストリーは、ユビキタスになってくると、誰のためにやるのかな。たとえば昔の政治家ならその人のことを知りたいと思うのですが、これだけたくさんの人がやり出すと誰に向けて発信しているのかわかりません。自分自身なのか、特定の文化とかサブカルチャーに興味を持っている人向けなのか。そもそもそういう質問自身がナンセンスなのでしょうか。つまり、いったい誰のための思い出かということなんです。

野島 基本的には自己表現、なかでもコミュニケーションとエンターテインメント以外にはないと思っています。エンターテインメントのコンテンツとして自分自身の過去って最高じゃないでしょうか。誰かのためというよりは、やはり自分のため、自分が誰かと親しくなるためのコンテンツだと思います。自分のためにはかなり投資するので、それはそれでアリじゃないかと。

須永剛司 そうすると、誰かと知り合ったり、何かことを起こしたりするというアクションが思い出コンテンツの基本にあるということになりますね。思い出はただ貯めることじゃなくて、アクションを起こすための一つの手段としてあると。するとあるアクションを起こしたいからこれを貯めるんだということが言えてきて、もう少し思い出そのものの定義が定まってくるんじゃないでしょうか。そのアクションを定めることによって、ただ何となくやろうと思えばやれる時代になった今、一体誰がなんのためにやりたいんだとい

うところが定まってくると思う。技術シーズからの話になると、あれもできるこれもできるというけれど、それだけでは一体人々が何をやるのかがわからないわけですよね。最初に私たちがアクションというか、出会ったり何かするために思い出が必要なんだという一つの活動フレームワークを手に入れるべきだと思います。昔はどうやってアルバムを作っていたのかということも考えなくちゃいけない。女の子たちのプリクラも新しいアルバムづくりの活動という視点でみると興味深い。技術的に「できるから」の話になるとむなしさを感じがしますね。

野島 「できるから」で進んでいる人たちにつきあうかどうかという議論はあるでしょう。でもやはり、あのときのあの写真を撮っておけばとか、そういうようなことってありますよね。それはもしかしたら技術で可能になるという夢を見ることはできます。問題は、どこに着地点があるのかということ。

関根 議論がどこから出発しているか、よくわからないんです。思い出と記憶は違いますよね。思い出というと「なんのための」（という次のアクション）にちょっと近づいてきます。だけど記憶はどこにでもつながっていきます。そういう整備された議論はあるんですか？

野島 思い出という言葉は心理学のタームではないんです。そういう意味で言っても、まだ全然整理はされていないと思います。

関根 思い出は何のためにあるのかということにかんして言えば、たとえば『ノスタルジアの社会学』を書いたデーヴィスが、人間不安になったら思い出す、ノスタルジーは不安な時期に盛んになるといっています。青年期の不安と老年期に入ったときの不安の二つがあるというわけです。それは時代的にいえば不安な時代にノスタルジックになって、ナショナリズムやファシズムが起これ

やすい。だから今のわれわれの日本の社会の昭和30年代ブームも一種の日本の不況の反転像だという説明もあります。

美崎さんが、記録を横で見て「ずっと今みたいだ」という、その答えは非常におもしろいと思います。なぜこういうことをするのかはわかりませんが、強いて解釈すると、自分の過去を思い出すというのは、今の不安を解消するために役立っているのではないのでしょうか。「ずっと今みたいだ」という答えは非常にシンボリックだと思います。

もう一つは、人の一生には往路と復路があると思うんです。例外はあるにせよ、一般的には中年も後半になってくると復路に入ってくる。がんが何かやっているときは記録を残そうとあまり思わないけど、人生の帰り道には昔話をしたくなるものです。ところが時代は変わって、今はきっと若い人もすぐ2、3年下に向かって「私はおばさんになった」とかいうように、つまり行きと帰りがものすごく小刻みになって来ているのではないのでしょうか。しょっちゅう行っては思い出ししないと落ち着かないのかもしれませんが。つまり一生かけて自己実現するのではなく、ちょっと努力したらもうその結果を見ないと安心しないというか。それがもっといったら美崎さんみたいになる……かどうかはわかりませんが。

美崎さんは実験的にやっているんでしょうけど、もしそれが大衆化したら、ちょっと気持ち悪いですよね。人は必ず自分の存在を埋め込み、意味づける共同体が必要です。その共同体が今非常に見えにくくなっています。ユビキタス社会はもしかしたら一人共同体を作る可能性があるの

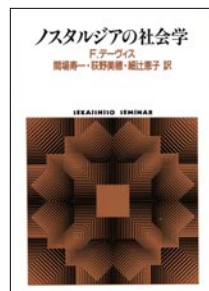
ではないでしょうか。つまり「私」と「私の記録」が常に対話するような状況によって、一人世界、一人共同体がつくられる。それはたぶんある意味では大変いい解決策かもしれませんが。人に頼ると、必ず怪しげなカルトとか、そういう変な共同体に吸い寄せられる人たちがいるから。それで犯罪まで行くことがあるかもしれない。その意味では一人共同体でみんな勝手にやっていたら、ある種安全な社会ができるかもしれませんが。そんなに簡単な話ではないと思いますが。

佐藤浩司 共同体の話ですが、たぶん関根さんの言う共同体と私のイメージしている共同体はずいぶん違うのだと思う。空間的情念的なものではない、空間と切り離された別な形の共同体ができつつあると思っています。空間的な一人共同体は今でもあるでしょうけれども、実はそれは一人じゃない。

関根 言葉の使い方が合致していないですね。私の言う共同体は普通の閉じた共同体です。佐藤さんの言うネットワーク型の共同体は想定していないんです。

佐藤浩司 伝統社会の共同体と一人共同体といわれる人たちはそれぞれどうやって自己実現しているのかという話だと思うんです。そうするとその共同体は当然伝統社会では空間的にも閉ざされた共同体ですよね。

実は、この研究会ではあまり理論的な議論でとどまっていたくないんです。今、我々が直面していることがものすごくおもしろくて、何が起きているかを知りたいということがまず最初にあります。たとえば、きょうも話にでていた美崎薫さんに来てもらって実際に話を聞きたい。対比として関根さんのように人類学的に地道に調査をしている人の話も聞いてみたい。とりあえずそれを今年度いっぱいやってみた上でどういう方向に行くかはわからないんですが、メンバー自身の発表はその後にと思っています。



『ノスタルジアの社会学』フレッド・デーヴィス著 間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳 世界思想社(1990)

ゆもか研 NEWS Vol.1

2004年10月発行

発行人 佐藤浩司

発行所 「思い出」はどこに行くのか？ ユビキタス社会の物と家庭にかんする研究会

©佐藤浩司・野島久雄他, 2004

—編集後記—

ゆもか研 NEWS Vol.1 はいかがでしたか。
ご意見や感想などがありましたら下記メールアドレス宛にぜひお知らせください。

info@yumoka.com

次回研究会は2004年10月23日（土）
です。ゆもか研 NEWS Vol.2でご報告します
ので、お楽しみに。

編集担当 * 大谷裕子

special thanks to Yuka Suzuki